以上、各章の内容を概観したように、本書は移民第二世代の若いムスリムたちがいかに自身の有するアイデンティティを理解し、イギリス社会の中で日々の暮らしを営んでいるのかについて、インタビュー調査に基づく肉厚な記述を行うとともに再帰的近代のアイデンティティ論という新しい観点から論じている点に大きな意義があるだろう。西洋社会と相容れないイスラームというステレオタイプな見方に対して、著者は詳細に先行研究を検討しながら豊富なインフォーマントの語りを分析し、説得力のある反駁を行っている。特に、テクノロジーの発展から個人レベルでのイジュティハードが可能となり、とりわけムスリム女性は教育やヒジャブの着用を通してイスラームとの関わり方を選択し、実践しているという指摘は非常に興味深い。

このように非常に有意義な本書の議論であるが、本書が対象としている移民第二世代ムスリムの属性の偏りについては頭の片隅に留めておきたい。著者が第4章で述べている通り、本書の対象とするインフォーマントはバングラデシュやパキスタンなどのアジア系のエスニシティを有しており、高学歴かつフルタイムで就労している者が大半を占めている。前者のエスニシティに関して、第7章においてインフォーマントがアレンジド・マリッジなどを事例に文化と宗教を区別し、インフォーマントがアレンジド・マリッジなどの抑圧的慣習をイスラームではなくアジアの文化に由来するものとしてみなしている点を著者は指摘しているが、これは他の地域（例えば中東地域）に文化的帰属を有する場合であっても同様な指摘が可能なのか疑問に感じた。評者が研究しているシリア難民の事例から考えると、彼らのアラブ文化はイスラームと区別できるようなものではなく、かなり密接に影響し合った不可分のものに思われる。つまり、著者が指摘するようにイスラームを擁護するために文化が犠牲として差し出されているというよりも、そもそもエスニシティの問題として「アジア」に対する否定的なディスコースがアジア系であるインフォーマントの中に存在しており、それがイスラームと対比されているのではないか、という疑問である。また、後者の高学歴なインフォーマントが多いという点について、本書のインフォーマントと異なって高等教育を受けてこなかった移民第二世代ムスリムたちがどのように自身のアイデンティティを規定しているのかについても比較が行われると、さらに本書の説得力が増すだろう。

本書は総じていえば非常に学術的意義のあるものであり、移民・難民研究に従事する者だけではなく、アイデンティティ論やイギリス社会、イスラームについて学ぶ者をはじめとする広い読者に是非一読をお勧めしたい。

（望月　葵　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

野田仁・小松久男（編著）『近代中央ユーラシアの眺望』山川出版社　2019年　315頁

「中央ユーラシア（中央アジア）とはどこか」と聞いて、答えられる日本人は一体どれくらいいるのだろうか。少なくとも評者は、（専門家を除いて）そのような日本人と出会ったことがない。かくいう評者自身も、ほんの数年前まで同様であった。とはいえ、それと聞いて連想するものがないかといえばそうでもない。たとえば「シルクロード」や、近年ならば中国の「一帯一路」政策、天然資源の産出国としてカザフスタンの名前をニュースや新聞で聞いたことがあるかもしれない。けれども、それでもなお中央ユーラシアに対して、大方の日本人は曖昧でぼんやりとしたイメージしか持っていないというのが現状なのではないだろうか。

本書はそうした、いまだ漠然としか捉えられていない中央ユーラシアの歴史像を、読者に鮮明にイメージさせることを目的に編まれた論集である。時代としては、中央ユーラシアが近代帝国に包摂されていく19世紀から20世紀初頭に焦点をあてる。地理的範囲としては、ロシア帝国支配下におかれた西トルキスタンと清朝支配下におかれた東トルキスタン、すなわち現在のウズベキスタン、カザフスタン、クルグズスタン、タジキスタン、トルクメニスタン、新疆ウイグル自治区を対象とする。大学生・大学院生を中心に広く中央ユーラシアに関心をもつ読者に向けて編まれた本書は、15名の執筆者らによる最新の現地調査を踏まえた研究成果を伝えるものである。

本書は、はじめに、プロローグ、エピローグのほか、13章で構成される。全体の章立て及び執筆者は以下の通りである。

はじめに　中央ユーラシア史研究の現在（野田仁）
プロローグ　遊牧民とオアシスの民，そして交易
——モグール・ウルスからジューンガルへ（小沼孝博）
第 I 部　遊牧民社会の実像
第 1 章　英雄叙事詩が伝えるノガイ・オルダ（坂井弘紀）
第 2 章　遊牧民の法と社会
——ロシア統治下カザフ草原における 19 世紀前半の変容（野田　仁）
第 3 章　遊牧英雄のリアリズム
——近代を生きたあるクルグズ首領一族の生存戦略（秋山　徹）
第 4 章　カザフ知識人とイスラーム
——遊牧民社会の近代化の方向性をめぐって（宇山智彦）
第 II 部　オアシス地域の変動
第 5 章　19 世紀コングラト朝ヒヴァ・ハン国の君主像（塩谷哲史）
第 6 章　ワリー・ハン・トラ
——コーカンド・ハン国滅亡期におけるマルギランのスーフィー指導者（河原弥生）
第 7 章　中央アジアの綿花モノカルチャー
——ロシア帝政期からソ連初期のフェルガナ地方を対象に（植田　暁）
第 8 章　東トルキスタンの近代
——ジャディードたちの改革運動（清水由里子）
第 III 部　イスラームとネットワーク
第 9 章　タタール商人の新疆進出（濱本真実）
第 10 章　オスマン帝国からみた中央ユーラシア
——汎イスラーム主義の射程（佐々木紳）
第 11 章　帝政ロシアのムスリム女性言説とその共振
——A. アガエフの著作を中心に（帯谷知可）
第 12 章　言説空間のひろがり
——アブデュルレシト・イブラヒムの足跡をたどって（小松久男）
第 13 章　帝国の協力者か攪乱者か
——ロシア帝国のタタール人の場合（長縄宣博）
エピローグ　中央アジアにおけるソ連時代の記憶（ティムール・ダダバエフ）

以上、目次に示した通り、本書は遊牧地域・オアシス定住地域・イスラームネットワークという枠組みによって構成されている。ここからは紙幅の関係上、評者の研究に関連する一部の章に限って紹介していく。ちなみに評者の関心は、遊牧民の物質文化としての手織り物にある。

ロシアがカザフ草原に進出した 19 世紀前半において、カザフ遊牧民たちはどのような影響を受けたのだろうか。第 2 章（野田）は法制度の側面から、その変容を論じる。土地をめぐる係争の事例とその解決過程、背景となる法規について整理することで、過渡期のカザフ遊牧社会の様相、とりわけ部族社会の有力者層の交代について具体像を示した。

一方、山岳に住むクルグズ遊牧民の場合はどうだろうか。第 3 章（秋山）は、その生存戦略について、ロシア帝国の「協力者」となったシャブダン一族を題材に解き明かす。彼ら遊牧民は軍事的側面のみならず、むしろ広範なコネクションの構築と、それに基づく情報収集によって「リスク分散型志向」ともいえる戦略性を兼ね備えていたことを明らかにした。

近代帝国支配の下、カザフ草原では遊牧民の定住化がすすんでいた。第 4 章（宇山）は、定住化後のカザフ人が近代化とイスラームの関係をどのように理解していたのかについて考察する。カザフ知識人のあいだで交わされた教育、定住化、慣習法とシャリーアなどの論争を分析することで、西洋的近代化か、イスラー

ム的近代化か、と二分する議論のなかで、前者が遊牧的慣習の護持を、後者がラディカルな定住化論と結びつくという現象を解き明かした。

また、オアシス定住民社会においても「遊牧民の政治的伝統」は、連綿と引き継がれてきた。第5章（塩谷）は、コングラト朝（1804～1920年）ヒヴァ・ハン国を事例に、チンギス・ハンの血統とイスラーム的権威との関係について、宮廷年代記史料を軸に考察する。その結果、コングラト朝は遊牧君主とシャリーア双方の権威・伝統を矛盾なく体現する政権であったことを示した。

近代中央アジアの農業経済史の中核であった綿花栽培は、物質文化研究とも関連している。第7章（植田）は、ロシアの工業発展としての役割という従来の研究視点ではなく、現地への影響を主眼とした綿作の歴史への再検討を行う。GIS（地理情報システム）による統計資料の分析をとおして、1920年代における綿花モノカルチャーの復興が税制上の綿作優遇政策のみならず、前貸し政策による優遇処置によって可能となったことを明らかにした。

さいごに、ロシア・ムスリム地域における女性の問題についてどのような議論がなされてきたのだろうか。第11章（帯谷）は、アゼルバイジャン出身の知識人A.アガエフ（1869～1939年）の『イスラームによる、そしてイスラームにおける女性』（1901年、チフリス）を史料として、ロシア語による論壇の一端を示した。アガエフの「イスラームにおける根源的男女平等」言説は、オスマン帝国における思想とも共振しつつ、西洋への憧憬も垣間見られるものであったことを明らかにした。

以上、極めて簡略ながら本書の概要を述べた。評者にとって本書の意義は次のようなものである。まず現代のウズベキスタンをフィールドに人類学的研究を志す評者にとって、この地域の人々が経験してきた事象や歴史認識を知ることは、不可欠な手順といえる。ソ連末期におけるペレストロイカ以後、ソ連史学において語ることを許されなかったような史実の発掘が盛んとなり、歴史上の人物や事件を再評価する流れが起こった。独立後も中央ユーラシアの各国は「歴史の見直し」をはかることになるが、その際、国によっては現在の独立国家としての存在や民族の正統性を是とする立場からナショナリズムが強調されるあまり、ソ連体制あるいは社会主義体制を悪弊とみなす傾向が強まった［帯谷 1998: 74］。それゆえ、現代の中央ユーラシア社会について考える際には、ソ連時代にも独立後の現代にもそれぞれのバイアスがあるという前提の上に、史料に立脚しながら史実を再構築する必要がある。本書は、そうした姿勢を一貫して示しており、その点が最もつよく印象に残った。

2点目は、中央ユーラシア地域におけるイスラーム研究への視座を与えてくれる点である。ウズベキスタン産の手織り絨毯の研究を通して人々の宗教実践や精神文化について考察しようとする評者は、遊牧文化とイスラームの関係について関心をもっている。本書でも、塩谷（第5章）が統治原理において論じたように、双方は矛盾なく体現されていたことが明らかとなった。しかし、宗教的価値観やイデオロギーといった複合的かつ観念的な事象をあつかう場合、「遊牧か、イスラームか」といった二項対立的なものの見方は弁別的になるあまり、双方の現実の重なり合いや第三の要素を無自覚に捨象してしまうのではないだろうか。そうした点で、宇山（第4章）の論考は示唆に富む。19世紀のカザフ知識人が様々な議論を重ねながらも決して一様ではなかったように、現代の人々にとっても多様な受けとめ方があって当然である。何をもって「我々らしさ」とするのか、「我々たらしめるもの」は何か、というアイデンティティの問題は、常に社会的な文脈のなかで可変的であり、当該地域の「伝統」文化について考える際にも非常に重要な視点を含んでいる。

3点目は、評者の研究対象である手織り物生産者すなわちムスリム女性をとりまく問題について、理解を深める契機となった点である。ムスリム女性は、はたしてヴェールを強いられた哀れな存在なのか、棄教したくてもできない抑圧された存在なのだろうか。評者はかつてウズベキスタンのとある農村バザールで手刺繍の布を売る女性から印象深い言葉を受けたことがある。土産物を何点か購入して袋詰めをしてもらった際、よそ見をしていたので念のため袋から中身を取り出して確認したところ、「だいじょうぶ。私は、ムスリマよ」と、たしなめられた。評者は、観光旅行でいつの間にか染みついていた自分の猜疑心を恥じると同時に、その女性が自身のモラルをその信仰にもとめたことに驚いた。こうしたことは、イスラーム世界では男女問わず当然のことなのかどうかはわからない。しかし評者の目にはその女性の深い部分にイスラームへの信仰心が根をはっているように見え、ムスリム女性が――少なくともその女性に限っては――ヴェールを

強いられて身につけているようには映らなかった。ムスリム女性のヴェール問題のみならずジェンダー規範は、今日まで繰り返し議論されつづけている。帯谷（第 11 章）は、ロシア・ムスリム女性の問題の議論として新たにロシア側の論壇を示すことで、従来研究されてきたタタール人ムスリム側の論壇に加え、19 世紀から 20 世紀への変わり目の時代の論調を立体的にとらえた。このような試みは、現代のムスリム女性をめぐる問題へとつながる今日的な展望をももっている。たとえば、ウズベキスタン牧畜地域をフィールドとする宗野ふもとは、ウズベク人女性の描かれ方について、現地女性の視点から論じることの重要性を主張する。［宗野 2014］は、手織り物生産など女性たちの生活実践を民族誌的に描くことによって――当事者であるムスリム女性の視点を取り上げることによって――従来、問題視されてきたウズベク人女性の「周縁性」が市場経済の論理やジェンダー規範の再評価から一方的に規定されたものであることを示した。

さて、さいごに瑣末なことではあるが読者としての視点から本書全体への要望を述べよう。本書は時系列順に構成されてるわけではない。これは、本書の趣旨から考えると致し方ないことではあるのだが、初学者が中央ユーラシアの全体像をつかむには少々骨が折れるのではなかろうか。編者が「大学生・大学院生を中心として広く中央ユーラシアに関心をもつ方にぜひ手にとってほしい 1 冊である」（p. 3）というわりには、専門用語の注釈説明などがあまり十分になされていない。さらに、年表などの読者の理解を手助けするような付録もつけられていないため、ある程度、中央ユーラシア史の概観を把握し基礎知識を身につけている者でないと、本書はややハードルが高い印象を受けた。

とはいえ、本書は中央ユーラシア近現代史研究を代表する優れた専門家たちによる論集であり、各論は極めて明快な文章で著されている。よって、読者がもし中央ユーラシア史に興味をもちはじめたばかりの初学者ならば、少なくとも一度は中央ユーラシア史に関する概説書を通読したうえで、事典等を片手に読みすすめることをおすすめしたい。

引用文献

帯谷知可 1998「ウズベキスタンにおけるバスマチ運動の見直しとその課題」『地域研究論集』1(2), pp. 73–89.
宗野ふもと 2014「合い間の仕事としての手織り物生産――ウズベキスタンにおける社会変容と女性」『アジア・アフリカ地域研究』13(2), pp. 212–248. <https://doi.org/10.14956/asafas.13.212>

（志田　夏美　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

Alexander Betts, Louise Bloom, Josiah Kaplan, and Naohiko Omata. 2017. *Refugee Economies: Forced Displacement and Development*. Oxford: Oxford University Press. xxi+245 pp.

世界には約 6500 万の人々が難民として住む場所を追われることを余儀なくされている。難民問題は「今世紀最大の人道危機」と称され、連日のように世界中のニュースや SNS で脚光を浴び、それは今日まで国際問題の大きな一翼を占めている。こうした注目を受けて、様々な地域の難民を対象とした研究も活発に行われている。しかし、その多くは難民に対する各国の排他的政策、紛争、緊急人道支援の失敗、現地住民との対立・軋轢といったネガティブな観点からの考察が主であり、難民対応の成功事例に着目した研究はそれほど多くない。

本書は、コンゴ民主共和国、南スーダン、ソマリアなどから流入したウガンダにいる約 43 万人（2015 年 6 月の本書調査時点）の難民に着目している。そして、難民に基本的な社会経済的自由を与えられたときに何が起こるのか、「難民の経済（refugee economies）」という分析の視角を用いて難民の経済活動を明らかにしたものである。18 カ月間以上にわたる現地調査で得られた 2213 世帯のサンプルを利用した実証分析にもとづいた本書では、他国とは異なる難民のポジティブな自立の実態が描かれている。

本書は、オックスフォード大学難民研究センターを拠点とした人道的イノベーション・プロジェクト（The Humanitarian Innovation Project）の一環として刊行されたものである。このプロジェクトの目的は、難民自身の潜在力に焦点を当て、難民支援に関連するテクノロジー、イノベーション、ビジネスの役割を理解する